

## 岸田吟香と薬学会選挙

薬学雑誌 1902 年度(明治 35 年)256 頁など

先々月に紹介した「人頭黒焼き売買事件」は飛行機研究家の二宮忠八が薬学会会員として書いたものだが、その記事を引き継いで本草綱目の人体由来医薬品を解説した人物も注目に値する。天靈蓋(人頭黒焼き)はじめ多くの「妙薬」について書いてくれたのは明治初期のジャーナリストとして有名な岸田吟香である。

彼は文久3年(1863年)横浜でヘボンの「和英語林集成」編纂を助け、明治6年、40歳で東京日日新聞(今の毎日)に迎えられる主筆として活躍、台湾出兵に従軍し最初の従軍記者ともいわれる。44歳で新聞社を退社、東京銀座に楽善堂を開き、ヘボンより処方教授された目薬「精錡水」の製造販売に専念する。それまでの目薬は塗り薬であったから、液体目薬は画期的だった。福祉活動にも積極的で、前島密らと明治13年に楽善会訓盲院(現 筑波大附属盲学校)を創設してい

る。麗子像の洋画家岸田劉生は息子。

明治30年64歳で日本薬学会常議員。この年の薬学会第17回総会における役員選挙結果が薬誌1897年2月号付録にある。当日出席者全員による投票は総数59で長井会頭、下山副会頭、幹事の丹波、山田まではほぼ満票に近く選挙前から決まっていたようであるが、定員10の常議員選挙は平山増之助(52票)、丹羽藤吉郎(51)、高橋秀松(50)、田原良純(45)と続き、岸田(22)は10位で初当選、曲淵景章(19)は11位で落選、以下1票の人まで37人に票は分散、打ち合わせなしの人気投票だったようだ。翌明治31年は108票中56票をとり資生堂の福原有信を抜いて9位当選、32年は8位当選(61票/113)だったが、33年14位(62/215)、34年15位(27/125)と以後は後進に席を譲る。しかし学会重鎮であったことに変わりはなく、薬学雑誌の編集委員としてしばらく活躍した。

昔、二宮、岸田、こういう傑人が薬学会に多くいた理由はなんだろう？ 有能な人は幾つもの分野で活躍するのが普通だったのか、あるいは薬には名士が集まりやすかったのか。

小林 力